大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

小児がん経験者の成長過程における心の変容：大病の経験を携えて成長するということ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 青木, 彩夏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017619

小児がん経験者の成長過程における心の変容
―大病の経験を携えて成長するということ―

青　木　彩　夏

1．目　的

子ども時代に大病をすることは，その人の心の成長に大きな影響を与えうる。大病を患い，長期入院を経験した子どもが成長する過程で，合併症や後遺症，再発の恐れがあることで悩んだり，それらとは関係なく，大病を経験したからこそ悩んだりすることがある。その悩みは，児童期・思春期・青年期で変容し，年齢に応じて考え方や病気の捉え方も変化していく。子ども時代に大病を経験した人々のアイデンティティー形成までの道のりには，いくつもの課題があると推測される。病気や障がいを自分の中でどう位置づけるのか，闘病の過去をどう自身の中に収めていくのか，という課題が小児がん経験者にはあると考えられる。普段は全く病気や障がいのことなど意識もせずに過ごしているが，困難に直面した際，その逆に何もないようなふとした瞬間等に，病気を意識し，悩み，いつの間にかあまり考えなくなり，というサイクルを繰り返しながら日々を過ごしているのではないだろうか。

益子ら（2011）によると，1983年から2011年3月までに発表された小児がん患児や小児がん経験者を対象とした先行研究の動向は，【闘病体験】，【看護援助】，【主体性及び自己効力感】，【生と死の認識】，【処置を受ける子どもの認知】，【QOLとソーシャルサポート】が主な研究内容である。研究デザインについては，小児がん経験者へのインタビューによる質的データを基に，よく出てくる言葉や悩み，考え等を抽出し，どのような傾向があるか等の結果を帰納的にアプローチする質的帰納的研究が42.1%と最も多くなっている。2011年以降の研究においても，前田（2013）の小児がん経験者の入院体験の質的帰納的研究を始め，複数の小児がん経験者を調査対象とした，帰納的な分析による研究が多く見受けられる。一方で，小児がん経験者の発病から現在までの成長過程における心的発達に焦点を置いた研究は盛んではない。発達の最中にある子ども時代に大病を経験した人を対象とした研究には，闘病体験や退院後の生活という一部を切り取った研究だけでなく，発病から現在までの成長過程を辿り，その過程での成長に関わった様々な要因を，その人の歴史すなわち成長という一つの流れの中で考察する研究も必要であると考える。

本研究では，子ども時代に大病を経験した方へインタビュー調査を行い，病気になってから現在までを振り返ってもらい，一人の子どもが病気になってから現在までの，心が変容していく過程を追っていきたい。その過程に併せ，その成長過程に深く関わったと考えられる要因についても併せて考察する。

2．方　法

調査対象者：児童期に小児がんの一種である骨肉腫を罹患し，青年期までに何度も長期入院を繰り返し，足に障がいを残した20歳代前半の女性1名。

調査内容：事前に調査の説明及び同意書を送り，同意の署名を得てから2回のインタビュー調査を行った。事前に質問紙にて，①年齢と職業，②病名と発病年齢，③病気の治癒の有無，④治癒時の年齢，⑤入院・治療・手術歴，⑥後遺症や合併症の有無，⑦後遺症や合併症はどのようなものか，⑧病気になって悩んだことはあるか，⑨その悩みの時期から抜け出したと感じるか，⑩その悩んだ時期はいつか（悩んだエピソードについては，可能な場合インタビュー調査にて語ってもらいたい旨を同時に記載），の10項目に答えてもらい，インタビュー調査の大まかなプランを立てるための参考にした。また，調査対象者が，発病当時から現在までを思い出すきっかけ作りも質問紙の目的の一つであった。インタビュー調査では，調査対象者の“語り”に重点を置き，骨肉腫の発症から現在に至るまでを時系列に語ってもらう形で進めた。病気を診断されるまで，治療時，退院後，と時系列に思い出しながら話してもらうことで，語られる病気や自身にまつわる様々なエピソードが，調査対象者の悩みや考え方に大きな影響を与えているだろうと考えたためである。インタビュー中はICレコーダーにて録音を行い，後日，逐語録を作成し，そのデータを基に考察を行った。

インタビュー内容は，調査対象者のプライバシー保護のため，研究の本質を損なわない程度に若干の修正が施されており，インタビュー内容の記載は調査対象者の許可を得ている。なお，本研究は，大阪府立大学環境システム学類研究倫理審査委員会の研究倫理審査により承認（2017年7月12日承認）を得て実施した。

3．事　例

事例：Aさん。10才の時に骨肉腫と診断される。現在は義足を用いて生活している。

インタビュー内容：骨肉腫発症当時，両親の希望により本人への病気の告知はされなかったが，しばらくしてカルテの「骨肉腫という言葉は使わないで」という文言を偶然見て病気を知る。病名を知ってからも，病気や治療を少し離れたところからまるで他人事のように捉えていたが，自身と同じ“足”の疾患があった友人の死によって，自身の病気や他者の死を客観的に見ることができなくなる。医師から改めて病気の詳細を聞き，「やっと，自分の身体に入ってくる薬がどう働くのか聞くように」なり，治療を少しずつ主体的に受けるようになる。退院後は，傷の消毒やガーゼ交換を自身で行うことを通して，自分の足への医療行為等をしっかりと理解するようになったと語る。骨肉腫の治療終了後も，足の温存のための手術や治療が4年程続く。切断までの間は，足を残すために手術や治療に取り組み，自身で傷の処置まで行っていたという。その後，感染症等により足の切断を余儀なくされた際，「もう自分で決めなければならない」と切断を自身で決断する。足を温存したいという母の強い想いを知っていたAさんは，当時入院していた母に「切断する。ごめんね」と電話で謝る。そして，切断からほどなくして入院していた母が病で亡くなる。切断と母の死が重なったことから，Aさんは一か月間他者との関りを断絶し家にこもりきりになる“闇の時期”を経験する。その時期に見たあるテレビ番組をきっかけに，「母は自分の命を私のために投げ出してしまったのだ」と思い，自分が生きていることに価値を見出す。そして，「このままでは自分の人生が終わってしまう。自分の人生をどうにかしなければ」と，どんどん自身の置かれている環境を変えていく。義足になって1年半程経った時に肺への癌細胞の転移が見つかる。「癌患者って，治療が終わって5年，10年って再発の確率が減っていくが，この時，ああまたゼロからだ」と感じたと語る。癌細胞の摘出は無事終了するも，今でも検査の際は異常がないと聞かされるまでは緊張すると語る。現在Aさんは，義足である自分自身の身体イメージを持って工夫しながら生活をしているが，時折疲れている時などに当時は優しかった医療従事者に冷たくされる夢を見ることがある。実際に治療を受けていた時よりも夢の方が現実味を帯びていると語る。また，幼い頃の自身と同じように病気で治療をしている子ども達や医療ドラマ等を見た際に，気をしっかりと持っていないと，傷がうずいたりすることがある。

4．考　察

現在のAさんの人柄や考え方を作り上げてきた要因が，いくつかのテーマに分かれるのではないかと考えた。そこで，まずAさんが病気になってから現在までの心が変容していく過程を追っていきたい。次に，それぞれの要因ごとの考察を進めていきたい。

Ⅰ．心の変容の過程

(i) 自身の状況を他人事のように捉える

Aさんは骨肉腫の発症時，病気の宣告をされず親にAさんの病気の全てが委ねられ，親が決めた治療方針に沿って，受け身の姿勢で治療を受けていた。骨肉腫という病名を知ってからも，自身の病気や治療，置かれている状況をどこか他人事のように捉え，自身を少し離れたところから客観視していた。Aさんは，自身の病気や状況を客観視することで，不安や戸惑いを感じている自我を抑制し，幼い自身の心を守っていたのではないだろうか。

(ii) 友人の死をきっかけに，病気を客観視できなくなる

抗がん剤治療も終盤に差し掛かった時期にAさんは自身と状況が似た友人の死を経験し，骨肉腫は癌の一種であること，転移をすれば死ぬということを知り，“死”や，自身の病気が恐ろしいものであることを理解する。前田（2013）は，「告知を受けていない患児は，不確かな状況から，治療による急激な体調悪化や同病者の死といった現実直視する体験を通し，楽観視から一変して絶望へと全く異なる体験をしたと考える」と述べている。Aさんは，他人事のように捉えていた自身の状況を，友人の死を通して自身の状況を直視する体験をしたのではないだろうか。Aさんが「自分のこととして見ていた」身体の疾患が同じ“足”である友人に自身を投影して，自身のこととして体験していたのであろう。この友人の死を通した体験が，Aさんが病気と自分とを統合する大きなきっかけになったと考えられる。主体的に病に取り組み始めていたAさんにとって，この友人の死は，生と死を直接感じ，考える契機になったのであろうと推測される。

(iii) 病気を自分のものとし，自身で判断をする

Aさんが，骨肉腫であるという説明を受けた後の手術のことを語る際は「足を切られ」「皮膚を貼られ」と，受動態を用いた表現が多く見受けられる。言葉だけを切り出すと，受け身で治療を受けているように聞こえるが，これは，Aさんが治療を“自分が”受けているものとして経験していたことを表す表現なのではない

だろうか。自身の意思とは関係なく，治療が進んでいく様子をしっかりと把握している姿が伺える。傷口の破裂で緊急搬送された際も，医師の指示，自身に降りかかる物事を理解し，医師に「麻酔なしでいいから切って」と指示までするようになる。切断か切開か，差し迫った際には，「もう自分で決めなければならない」と自覚し，自分の意志で切断を決意する。ここでAさんが，“自分で”という表現を用いているところが印象的である。それまでは，知らないところで大人が治療方針を決め，それに疑問を抱くこともなく治療を受けていたAさん。病気を知り，治療内容も自身の身体についても理解を徐々に深めるも，母の“足を残してほしい”という願いに沿う形で，毎日のガーゼ交換や通院をして生活を送っていた。しかし，切断か切開かを迫られた際に“自分で”自身の足の今後を大きく左右する決断を下すのである。Aさん自身がこの時の決断を“自分で”という言葉を用いて自覚していることからも伺えるように，この決断の瞬間に，母からの自立の大きな一歩を踏み出したのであろう。そして，この決断を自身で下したということをAさん自身が自覚していることこそが，Aさんの心の成長を根底から支える基盤となったのではないだろうか。病気に関する事象に対しての能動性に乏しかったAさんが，主体的に病気と向き合い，取り組むことができるようになった，という事実がAさんの心の成長を支えたのではないだろうか。

(iv) 一か月間の“闇の時期”を経験する

Aさんは，足の切断から間もなくして母との死別を経験する。そして，一か月間の“闇の時期”を経験する。この切断と母の死の直後というタイミングで“闇の時期”を経験したことは，Aさんの心の変容に大きな意味をもたらしたと思われる。母と，母の想いで守っていた足の，Aさんにとっての母なる存在を一気に失ったことによる“闇”であろう。しかし，足を切断することは，Aさんにとって足との別れや，母との別れだけではないのではないだろうか。Aさんは発病から切断まで，ずっと自身の足と“別れないため”に自身の子ども時代を治療に捧げていた。Aさんの足には，母や医療従事者の想いや願いだけではなく，Aさんの歴史そのものが詰まっている。Aさんの右足は，自分自身の一部でもあり，それまでのAさん自身でもあり，共に苦しい治療を乗り越えてきた“相棒”でもあったのではないだろうか。右足と母は，それまでのAさんにとっての“生きる意味”だったのではないだろうか。切断の決意で，母からの自立の一歩を踏み出したばかりのAさんにとって，それまでAさんを支え続けた足と母という大きな柱が二つ欠けてしまった事実は，想像を遥かに超える苦悩となり，Aさんを“闇の時期”に陥れる。「切断して，小児科時代がやっと終わった」というAさんの言葉からも明らかなように，右足との別れは，発病から切断までの自分との別れであり，切断によって小児科時代のAさんが死んだ，と考えられる。この“闇”の一か月の間に，Aさんは，小児科時代の自分，相棒であった足，共に治療を乗り越えてきた母，これらとの喪の作業に取り組んでいたと考えられる。それまで感情を表に出してこなかったAさんが，悲しむ時に悲しみ，どうしようもない喪失感に取り組むことが，死別を乗り越えるために必要なことであったのではないだろうか。Aさんは「早い段階で切断していたら，闇の時期もなかった。自分で人生変えようとも思わなかった」と語る。足と母を失うという，他でもないこのタイミングに“闇の時期”を経験することが，Aさんの心の成熟にとって必要不可欠なものであったのであろう。そして，その時期に見たあるテレビ番組をきっかけに「このままじゃ自分の人生が終わる」と自分の人生を自分の力で切り拓こうとしていく。それまでの“死んだ”自分の人生に引きずられたままではなく，喪の作業を終え，これからの人生，すなわち，再生した自分を生きるようになっていく。

(v) 義足の自分を生きる

「受け入れたとは思っていないが，受け入れていないとも思わない。義足であることは常に頭にあるし，自分の今の状態で課題をクリアするための工夫をする」と語るAさん。義足になった今の自分の状況を理解し，今を生きようとしている。「工夫すれば義足でも結構できることはある」とAさんは言う。どうすれば転ばないか，どうすれば課題を克服できるかを，Aさんは常に考えながら生活している。自身の身体イメージを常に頭に置きながら生活するということは，常に自身の身体を介して“生きる”ということを意識しているということではないだろうか。Aさんは，自身の身体を媒介として，世界と繋がり，現実を把握して“今”を生きているのだと考えられる。ゆえに，自身の病気を他人事のように感じていた時とは違い，今の自分の置かれた状況を自身の問題として捉え，取り組むことができているのではないかと考えられる。また，病気や障がいの受容ということ自体は，Aさんにとってはあまり問題でないのではないかと思われる。「大人になって色々とわかる今の方が良い」「早い段階で切断した自分を想像しても，今よりは障がいは少な

いだろうが，高校で切断した今の自分の方が良い」「実際に治療を受けていた時よりも，今夢で経験する方が現実味を帯びている」という言葉からもわかるように，過酷な経験を数多く乗り越えながら，Aさんは徐々に辛い治療を数多く経験した過去を自分の一部として収め，その過去を抱えながら生きようとしているのではないだろうか。ゆえに，実際に治療を受けてはいたが，自身の立場を客観視していた幼い時よりも，自分自身を生きている今の方が，夢でもリアリティを感じることができるのではないかと推測できる。自身の経験を活かすことのできる医療系の職業を目指し，今まで生きてきた自分自身を携えながらAさんは今を生きようとしている。

(vi) 過去の経験を自分のものにしようと取り組む

Aさんは現在，過去の闘病経験を自身の中に収める作業の最中にあるのではないかと思われる。Aさんは，自身の闘病体験を他者に話すことによって自分で“復習”をしている，という。病院で自分と同じような治療をしている子ども達を見ると，過去の自分の記憶に引きずられそうになったり，足の怪我をした人を見ると，ないはずの右足の部分が疼くことがある。また，自分が当時されて嫌だった治療や手術を，冷たい医療従事者にされそうになる夢を時折見る。「全てを忘れては生きていけない」と語るAさん。充実した毎日を送っている今もなお，過去を置き去りにするのではなく，過去の経験も心に残して生きようとする姿が伺える。当時は表現することのできなかった，隠し続けた幼い自分自身の心に取り組むことが，Aさんの今後の心の成熟における課題となっていくのではないかと推測される。この課題については，後述でもう少し掘り下げたいと思う。

親の方針で治療を受けながら日々過ごしていたが，成長と共に，病気や障がいを理解するようになり，客観的に捉えていた自身の病気を自分のこととして捉え，理解し，考えていくことができるようになり，過去の経験・現在の自分の身体の状態を把握して生き始める，という変化がAさんの心の成長の軸となっている。Aさんの語りからは，長い闘病生活の中で，病気の宣告，友人の死，手術の失敗，自身での傷の管理，切断，等を経験し，徐々に病気や障がいが自分のものになっていき，自分自身を生きようともがく姿が思い浮かべられる。親に守られていた幼い頃から，自身を取り巻く世界を知り始め，自分自身の力で生きていこうとする自立への道のりは，健康な子ども達と共通の部分も多い。しかし，大病や障がいを抱え，多くの困難を乗り越えながら成長していくことは，並大抵のものではなかったはずである。友人や母親という，身近な人々の死を通して，生と死の意味を成長の過程で深く考え，切断という自身の身体の一部との分離，肺への癌細胞の転移等，自身の体験を通し，より一層死を身近に感じ，自分に起こり得ることであると身をもって学ぶ。また，“死”を知り，その意味を深く考え，生きることに意味を見出し，自分の人生を生きようと思うようになる。様々な身近な存在との死別，闇の時期等を経験し，病気を自分のものとして生きるようになったAさんは，過去を自身の一部として収めるために，幼い自分や，自身の心に落とされた冷たい部分と向き合い，取り組み始めているのではないかと推察される。

Ⅱ．心の変容における要因・契機

(i) 病気の真相を知る

Aさんは，骨肉腫発症当初，治療の内容や治療を受ける意味を理解しないままに，受動的に治療を受けていた。命を脅かされるものでありながらも，それを知らされないということは，なんだかわからない恐ろしいものにずっと付きまとわれることではないだろうか。しかし，それが何かわからないので自分からは取り組むというのが困難であり，Aさんは病気を宣告されていない時に，自身の状況を客観視し，病気に主体的に取り組むことができなかったのではないだろうか。病は身体の異変であるが，病自体もその人の身体で起こっていることであるので，その人の一部であるとも考えられる。病という，自身の意識ではどうしようもないものに脅かされるという経験は，自分でも知らない自身の無意識の部分に脅かされるということと類似しているのではないかと考える。ゆえに，大病に取り組むことは，自分自身に取り組むことにもなり，小児時代に大病を患った人は，心の成熟において，病や障がいに取り組むことは避けては通れないことなのではないかと推測される。Aさんは，自身の状況を見極め，推測し，少しずつ病という真相に近づいていく。病気を宣告されずとも，病に自分で近づいていくAさんは，自分の心の成長に取り組もうと，自ら無意識の部分に手を伸ばしていったのではないかと考えられる。病気の説明を受け，理解して治療を受けるようになってから，Aさんは少しずつ自身の病に能動的に取り組むようになる。

(ii) 切断と母の死

「人生のターニングポイントは母親の死」とAさん

も自身で実感しているように，切断や母親の死はAさんに大きな影響を与えた。Aさんは切断をしたことによる解放感よりも，母親を始め温存のために尽力した人々への申し訳なさを感じる。そして切断直後に，母親が亡くなる。この二つの大きな喪失が,Aさんを“闇の時期”に陥れる。その一か月間は，外部との連絡を一切取らずに，自室に引きこもっていたという。そんな中，あるテレビ番組をきっかけに，このままの状態や自身に嫌気が差し，『自分の人生をどうにかしよう』と思うのである。Aさんはそれまで，母ありきの人生を送っていた。何もわからずに入院し，親に従って治療を受け，親が残したいと願い続けた足の温存のために，自身の思春期を捧げていたと言っても過言ではない。Aさんは，“母の”人生を歩いていたとも捉えられる。成長に伴い少しずつ病気や障がいを自分のものにしていったAさんは，切断を自身で決断することを通し，母からの自立のための一歩を踏み出す。母の死の意味を考え，自身の命に価値を見出し，母の人生ではなく，“自分の人生”を自分の力で切り拓いていこうとする。母の死によって，Aさんの命は母の犠牲の下で成り立っているという価値が生まれ，Aさんに今を生きる力を与えたのではないだろうか。Aさんは度々，「周囲の人に生きる力を感じない」「みんな経験していないから知らないのは当然だが，生きるっていう意味を知らない」と語っている。Aさんは，母や友人の死，Aさん自身も命を脅かす病と闘っていたことから,死が身近であり,死を理解しているからこそ,“生きる”ということに大きな意味を見出している。「健康に育ってきた人とは，視点も次元も違う」というAさんの感覚は当然のことではないかと思われる。Aさんの語りからも推測されるように，切断と母の死によって，それまでの母や足のある自分自身と決別し，それまでの経験を携えながら，新しい“自分の”人生を歩んでいく。切断や母の死は，Aさんが“小児科時代の自分”と別れ，新しい自分の人生に踏み出していくための契機となったのである。そして,Aさんは,“自分の人生”に自分で責任を持ち生きようとする，心の変容を遂げたのであろうと思われる。

(iii) 歩まなかった方の人生と今の自分の人生

Aさんは時折，“もし早い段階で切断をしていたら”と想像することがある。早い段階で切断をしていれば，皮膚移植を何度も受ける必要も，長期入院の必要もなく，現在の障がいも軽かったであろうとAさんは語る。しかし，早い段階で切断をした自分を想像しても，その自分を尊敬することができないのだという。「以前まではよく，歩まなかった方の人生を想像していたが，今は自分の世界に少し戻ってきた」というAさんの言葉からもわかるように，今の自分に行き着くまでに，何度も別の人生を想像していた。また，Aさんは，「自分の人生のプラスになるように，考え方を意識的に変えてきた」と語る。これまでの経験がなければわからなかった他者の気持ちや，周囲とは次元が違う視点を得たことによって，Aさんの人生は豊かになった。しかし，そのことに気付き，それを肯定的に捉えることができなければ，これらの獲得も人生を豊かにするものにはならないであろう。何度も自分とは違う人生を想像して今の自分と比較することを通して，自分の過去や現在を徐々に自分の中に収めようとしてきたのではないだろうか。

(iv) 手術台にいる自分

Aさんは，疲れている時等にしばしば悪夢を見る。優しかった周囲が冷たくなり，自分がされて嫌だった医療行為を説明もなしに受ける夢であり，実際に治療を受けていた時よりも夢の方が現実味を帯びているという。なぜ現在見る夢の方が現実味を帯びていると感じるのであろうか。現在のAさんは，実際に治療を受けていた時よりも病気や治療，自身の身体についての理解があり，自分の人生を切り拓いて生きていこうとしている最中である。ゆえに，治療を受け身の姿勢で受けていた幼い頃よりも，現在見ている夢での方が現実味を帯びているのかもしれない。また，夢に出てくる医療従事者を「優しかった人達の逆。みんな冷たい」とAさんは表現する。当時何も知らないAさんに医療行為をする医療従事者に感じる冷たさ，抵抗することのできない無力感を，この言葉は表現しているのではないだろうか。手術台に寝かせられ，冷たい医療従事者に麻酔のためマスクをつけられそうになる直前や，リハビリをする直前，傷を触られる直前にAさんは夢から覚めると語る。何も教えてもらえずに，ただ治療を受けることに心の奥底では恐怖や不安を感じていた幼い自分が，Aさんの心の中にまだ残っているのではないだろうか。夢の中で，今度は客観的にではなく，自身のこととして体験することで，過去の自分と向き合っているのかもしれない。他人事の様に治療を受けていた時期の“説明もなしに医療行為を受ける”ということを，理解している今の自分が夢の中で追体験しているとも推測される。

この夢を，少し違う視点でも考察してみたい。この悪夢での冷たい医療従事者は，自分に冷たくしているAさん自身であると捉えることはできないだろうか。

Aさんは，幼い頃は自身の立場を他人事のように捉えていたと語るが，幼いAさんが辛い治療を乗り越えていくためには，客観的に受け止めざるを得なかったのではないだろうか。「いつも，“何も考えてない”という風に振舞い，感情を表に出してこなかった」と言うAさんは，自身のネガティブな感情に蓋をして，表に出さないことで自分自身の心を守っていたのかもしれない。幼いAさんは，『辛い』『悲しい』『怖い』等の感情を持つ自分自身を冷たく扱い，隅に追いやることで，現実に向き合っていたのではないかと思われる。切断後に出会った人に「怒りたい時は怒っていいし，泣きたい時は泣いたらいい」と言われたことをきっかけに，Aさんは自分を表現することで，少しずつ自身の感情を表に出せるようになったと語る。しかし，今でもまだ“冷たい自分”は，Aさんの心の底に残っていると仮定すると，夢の中の冷たい医療従事者を通して，自身の感情に蓋をせざるを得なかった冷たい自分自身と向き合っていると捉えることができる。河合（2000）は，「イニシエーションの没入とは，ある症状や問題に対して，それを消滅させようとか，変化させようとするのではなくて，ますますそれに深く入っていく態度を意味する」と述べている。また，イメージや無意識が対象としての存在から主体に変わるという主客の転倒は，「よく心理療法の目標にされる人間主体の個性化ではなくて不安の個性化」と述べている。Aさんは，幼い頃に感じていた不安等の感情を夢の中で深める作業をしているのではないだろうか。客観的に捉えていたために，自身の心に生じるネガティブな要素を含む感情を，そのままの生の状態で扱うことができなかったAさんは，現在，そのような感情の“不安の個性化”を行おうとしているのかもしれない。ここでは，幼い頃に感じていたネガティブな感情を再体験することで乗り越えることが目標，という訳ではないと考える。ネガティブな感情をそのままに，すなわち，自身の中にある不安を不安として扱うことができるようになることが，Aさんの今後の課題となっていくのではないかと推察する。加えて，この“手術を受ける”という夢そのものがイニシエーションでもあると考える。Aさんは，骨肉腫になったことで，それまでの健康だった自分とは全く別の人生を歩んでいくこととなる。言い換えると，大病によって人生を変えられてしまった，という心理的事実を無意識の側からAさんに告げているのではないだろうか。Aさんは，違う人生を想像するも「これまでの経験は，自分の人生に必要だった」と語る。このイニシエーションを通して，自身に大病が降りかかった，それによって人生が大きく変わった，という事実に取り組んでいる最中にいるのではないだろうか。

（v）母の存在

Aさんにとって，母の存在は非常に大きなものである。子ども時代の入院では，母親がAさんに付き添い，共に治療を乗り越えてきた。また，母が強く望んでいたこともあり，患肢温存のための多くの手術や治療をAさんは受けていた。切断をする際に，母親に謝罪したことや，その後も申し訳ないという気持ちを抱えたままのAさんにとっての母の存在は計り知れないものである。日常での外出先でのエピソードで，「お母さんがかわいそう」「お母さんを称えたい」という幼児を連れた母親を気遣う言葉が多くみられた。幼児という手のかかる我が子を連れる母親に，当時の病気のAさん自身と共に生きていた母を見ていたのではないだろうか。また，電車の中で幼児を連れて謝り続ける母親に対して説教をするエピソードもある。これは，Aさんの“しっかりしていない母”への怒りの表れかもしれない。今思い返しても発病時に宣告をしてほしかったと思っているAさん。何も話してくれずにAさんの意思のないところで全てを決めていた母への，やり場のない感情が今もAさんの中にあるのではないだろうか。Aさんの夢に出てくる，何も説明をせずに治療を施そうとする“冷たい周囲”を，自分に説明をしてくれなかった母であると捉えると，Aさんに事実を隠す母に対してのAさんの冷たい視線であると考えることもできる。（ii）でも述べたように，Aさんにとって，生きるということは母と大きな関りがある。Aさんの母に対する感情は，両価的なものであり，この母への愛と怒りという二つの感情を抱き，その間で揺れ動きながら生きているのではないだろうか。

（vi）周囲が困難を共に生きる

Aさんの語りの中で，多くの看護師や医師の話が挙げられた。Aさんの闘病生活においては，家族や医療従事者の支えはかけがえのないものとなっている。Aさんへのはじめての骨肉腫の説明の際には，「親よりも看護師の方が泣いていたことを鮮明に覚えている」と語る。切断の手術の際には，多くの看護師がAさんを見舞いに訪ね，医師は遠方からAさんの手術のために深夜に戻ってくる。このようなことからも，Aさんが病気や苦難に立ち向かう際，家族や医師，看護師が共にそれらの苦難に取り組んでいる姿が伺える。また，切断後に看護師に本音を打ち明けた際に看護師が泣いたことも，Aさんにとっては良かったことだと

語っている。「“何も考えてません”みたいな感じで，底にあるものを出してこなかった」と表現するように，動じない態度で振舞っていたAさんの心の底にあるものを，親しい看護師が掬い取り，自分の感情を表に出さないAさんの代わりに泣いてくれたのではないだろうか。治療や切断という困難の下で成長する中で，共にその困難と取り組みながら寄り添おうとしてくれる存在は，Aさんの心の成長にとって，大きな癒しとなり，支えとなったのであろうと思われる。

6．おわりに

心が大きく揺れ動く時期に大病を経験した人々の各発達段階において，彼らに立ちはだかる困難は，通常よりも大きなものとなり得る。幼くして闘病生活を送る際，本当は泣きたい自分や，辛いと感じている自分を押し殺して治療に挑まざるを得ない子ども達は多い。ゆえに，その後も素直な感情表現ができないだけでなく，自分自身でも感じないようにしようと蓋をして成長してきた人が少なからずいるのではないだろうか。他者にも自分自身にも隠していた感情の処理や，成長に伴い変化する周囲の環境に適応するために行わなければならない意識的な考え方の転換は，成長過程において大きな課題になり得るものであり，同年代の周囲とはやはり違ったものであるのではないかと推測する。大病は，心の発達過程において，病や現実を乗り越えていくために，その人の意識の力に大きく頼らざるを得なくするものなのではないだろうか。そんな中，Aさんのように，夢等のイメージで無意識の側から補償することによって過去に感じていた感情や事実を自身に統合することが，心の成熟に後に必要になってくるのかもしれない。成長に伴い，闘病時に心の奥にしまっていた感情や幼い自分が経験したこと等に取り組んでいくことは，過去や現在の自分自身を見つめ直す際に大きな課題となり得る。そんな時に，周囲の人や出来事が，彼らが心の変容を遂げる要因ともなり，大きな支えともなるのではないだろうか。また，Aさんの事例は，子ども達への病の宣告を行うことの意義や，宣告をすること・しないことが，その後の心身の発達や治療に及ぼす影響も示唆するものである。宣告をすること・しないこと，の二者択一ということではなく，その選択が，病気や治療に対する姿勢，その子の一生にどのような影響を与えうるのか，そこにどのような支援が可能になるのかを検討し，宣告した，していないに関わらず，その子の心に寄り添い共に生きる医療が求められるのではないだろうか。

付記

本論文は，2018年に大阪府立大学現代システム科学域環境システム学類人間環境科学課程の卒業論文として提出したものを，加筆修正したものです。

文献

河合隼雄（1967）．ユング心理学入門．培風館，pp. 142-192.

河合隼雄（2000）．心理療法とイニシエーション．岩波書店，pp. 19-p59.

前田陽子（2013）．思春期に小児がんを発症した患児の入院体験―小児がん経験者の語り―.日本小児看護学会誌，**22**（1），64-71.

松本誠一（2009）．骨肉腫の手術療法．小児がん，**46**（2），181-183.

益子直紀・高橋ゆかり・二渡玉江（2011）．小児がん患児・小児がん経験者を対象とした研究の動向と今後の課題．上武大学看護学部紀要，**7**（1），35-44.

（2022年1月7日受稿，2022年2月7日受理）